

『あと少し、もう少し』

瀬尾 まいこ／作 新潮社（2004年）

一区。「設楽、ここまで！」最後の角をまがると、太田の野太い声が聞こえた。すごみのある太田の視線と、声に、プレッシャーは極度に達した。僕は死にものぐるいで走った。太田が怖いからじゃない。太田のライバルでいたいからだ。太田と同じ場に立てるやつでいたいからだ。

元いじめられっこの設楽、ヤンキーの太田。メンバーそれぞれの思いを胸に中学校駅伝を走ります。

『風が強く吹いている』

三浦 しをん／著 新潮社（2009年）

ハイジは走^{かける}の走りをほれぼれと見つめた。なんて美しいんだろう。これならいける。竹青荘（寛政大学 陸上競技部錬成所〈住人たちはこのことを知らずに入居していたが…〉）の住人も十人になった。駅伝だ。箱根駅伝をめざす。ハイジ以外の住人たちの「なんでだよ！」の怒号が飛び交うも、ハイジの「君たちに頂点をみせてやる」の言葉に、箱根へ向けての練習が始まった。

『一瞬の風になれ 1～3』

佐藤 多佳子／著 講談社（2010年）

兄に憧れてサッカーを続けていた新二。しかし、自分には兄のような才能がないこともわかったので、サッカーの強豪校には進学しなかった。しかし、高校生活三年間を無為に過ごすつもりはない。体育の最初の授業で50メートル走を走った時の爽快感。

これからは陸上で青春だ！！



『伴走者たち』

～障害のあるランナーをささえる～

星野 恭子／作 大日本図書（1989年）

「伴走者」とは、視覚障害のあるマラソンランナーにランナーと一本のロープを握り合せて、「伴に走る」人です。安全に走ることができるよう「目」の代わりとなって、道案内をしながら走ります。

障害のある人にとっては、運動は「いつでもどこでも」気軽に楽しめるものではなく、機会が制限されています。だれもが走ることを楽しめるようにささえる伴走活動について、何を思いながら走り、どんな工夫や努力をしているのかなどが書かれています。



『チーム』

堂場 瞬一／著 実業之日本社（2012年）

箱根駅伝への出場を逃し、母校代表ではない学連選抜チームとして箱根を走るようになった浦大地。圧倒的な速さで負け知らずが故にチームワークを無視する山城、情熱を内に秘める旧友の門脇、自らの不調でシード権を失った過去を持ち、膝の故障の再発に怯える浦。様々な悩みを抱えた選抜チームが、ありえないと言われる優勝を信じ、箱根を走る。

『ラン』

森 絵都／作 理論社（2001年）

私は走らなきゃならない。40キロを休まずに、六時間以内で。

夏目環 22歳。スーパーのバイト店員。運動神経極めて鈍し。趣味といえば、貰い物のロードバイク・モナミー号で走ることぐらい。モナミー号は完璧な自転車だ。あの世まで、亡くした家族と会いに行けるくらいに。でも私は、モナミー号に頼らずに、自分の足で走らなければならなくなった。ある少年の魂を救うために。やっと手に入れた、家族との団欒を失わないために。